

道の駅の物語

国土学アナリスト
大石久和
Hisakazu Ohishi

「道の駅」の発想経緯

「道の駅」がなかなかの人気スポットとなっている。すでに全国で一、〇五九カ所も登録されており、地域の集客施設として賑わっている。道の駅に野菜などを出荷している地域の人も購入者と直接的な関係ができることに生きがいを感じている人も多く、現金収入のありがたさも含めて地域の元気の源ともなっている。産直機能としても大きな役割を担っているともいわれるほどの規模に成長してきた。

その道の駅が、二〇一五年四月に発表された第七回日本マーケティング大賞を受賞した。受賞理由は、「休憩施設からインバウンドを含めた観光目的地、地元物産販売、過疎地の行政機能、防災拠点として、『新しい価値創造』に成功したこと」であった。

公的なサービスが大賞に選定されたのは初めてのことで、第一回の大賞はユニクロのヒートテックだったし、今回もミドリムシや妖怪ウォッチを抑えての受賞だった。これは「公共サービス」にとって、きわめて名誉なことだといわなければならない。

道路を持つ地域振興機能が、道の駅を通じて確実に発揮されていることが評価されたからである。最近、国土交通省は、地域の創意工夫の場としての道の駅を、『全国モデル』《重点》《重点候補》という分類で指定した。それぞれの道の駅においてさらなる工夫と、全国の道の駅がこれらの先進工夫駅を参考にしながら、新たなモデル駅を目指して地域の振興に努力して欲しいとの意味を込めた制度を創設したのである。

この道の駅は、そもそも発端が行政からの発想ではないところが面白い。社会実験運動の最初から、道路利用者だけへのサービスの観点ではなく、地域との交流という視点があったことが従来の施策になかったことなのだ。

発端の事情から二十四時間利用できるトイレは必須だったのだが、行政があれこれと設置基準をうるさく決めなかったことも普及に大きく影響した。また、実験開始段階で、トイレを設置するついでに、農協や漁協などから何か地域の産物を置いてもらおうと考えたのも素晴らしいことだった。

深澤淳志前道路局長によると、これだけ成功し発展を続けている道の駅であることもあり、「私が発案者だ」という方は少なくとも三人はいるという。私を知る社会実験開始の経緯は次のようなものである。

深澤淳志前道路局長によると、これだけ成功し発展を続けている道の駅であることもあり、「私が発案者だ」という方は少なくとも三人はいるという。私を知る社会実験開始の経緯は次のようなものである。

を行うための集まりがもたれた。それに山口県阿東町（現在は山口市阿東）で船方農場を経営していた坂本さんが参加するために、阿東町から自動車で広島に向かった。

ところが、当日はおなかの調子が悪く、頻繁にトイレに行かなければならなかった（調子が悪かったのは、氏ではなく同乗していた奥さんだったという説もある）。広島に向かうルートに国道一八七号があった。

この国道は一部区間で鉄道と並行していた。その鉄道は現在、第三セクターが運営しており錦川清流線と呼ばれている。彼はそのような調子だったものだから、この鉄道の駅を見つけたに立ち寄り、その度にトイレを利用しながら何とかたどり着いたのだった。

こうして会場に到着した坂本さんは、「鉄道には駅がありトイレがあるのに、何で道路には何もないのだ」と叫んだのであった。

道の駅の社会実験「トイレ」レポート

実に素晴らしいことに、この広島会場での参加者は素早い反応を返した。「では、道路の空き地などを利用し、道の駅としてトイレ実験をやってみようじゃないか」ということになったのである。広島、山口方面に道の駅創始者と名乗

ある。最近、国土交通省は、地域の創意工夫の場としての道の駅を、『全国モデル』《重点》《重点候補》という分類で指定した。それぞれの道の駅においてさらなる工夫と、全国の道の駅がこれらの先進工夫駅を参考にしながら、新たなモデル駅を目指して地域の振興に努力して欲しいとの意味を込めた制度を創設したのである。

この道の駅は、そもそも発端が行政からの発想ではないところが面白い。社会実験運動の最初から、道路利用者だけへのサービスの観点ではなく、地域との交流という視点があったことが従来の施策になかったことなのだ。

発端の事情から二十四時間利用できるトイレは必須だったのだが、行政があれこれと設置基準をうるさく決めなかったことも普及に大きく影響した。また、実験開始段階で、トイレを設置するついでに、農協や漁協などから何か地域の産物を置いてもらおうと考えたのも素晴らしいことだった。

深澤淳志前道路局長によると、これだけ成功し発展を続けている道の駅であることもあり、「私が発案者だ」という方は少なくとも三人はいるという。私を知る社会実験開始の経緯は次のようなものである。

深澤淳志前道路局長によると、これだけ成功し発展を続けている道の駅であることもあり、「私が発案者だ」という方は少なくとも三人はいるという。私を知る社会実験開始の経緯は次のようなものである。

求める人も多いと思われる。

歴史情報はどうかだろう。江戸時代にはどういう地域だったのか、街道はどこに何があったのか、当時の特産は何だったのか、どのような遺跡や遺物が当地には残っているのか。

人物情報はどうかだろう。この地域出身で活躍した人は誰だったのか、当地を旅したり滞在したりした著名人は誰で、どのような業績を残した人たちだったのか。

地誌情報はどうかだろう。当地の水自慢はどこにあるのか、この地域はどのような災害の経験をしてきたのだろうか、どのような気候・風土のところがいいのか。

未来情報はどうかだろう。この地域はこれからどうなっていくのだろうか、地域の人たちはどうしようと考えているのだろうか。

考えてみるに、スーパーやコンビニの存在理由は「どこに行っても同じものがある」というもので、これはこれで重要な価値に違いない。ところが、今は「そこに行かなければ得られない独特・唯一のものがある」というものへの価値意識が高まっている時代だといえる。

異なることを不安に思わず価値とすることは簡単なことではないが、それが真の地方創生を生むのである。